

Title	漢代居延戦線の展開 (特集 居延漢簡の研究)
Author(s)	伊藤, 道治
Citation	東洋史研究 (1953), 12(3): 221-241
Issue Date	1953-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138970
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

漢代居延戰線の展開

伊 藤 道 治

漢代居延地帯における烽燧の組織は、前漢武帝の末年太初・天漢の頃に、路博德が居延に屯田をしてより、以後次第に整備して行つた。然しこの地域の屯田烽燧の實態については何ら文獻の據る可きものがなかつた。幸い民國十九年西北科學考察團によつて發見せられた當時の文書である木簡は、この問題に對する重要な資料を提供した。特にこの西北科學考察團の調査報告を充分利用することの出来ない我々にとつては、勞幹氏が木簡について研究をなした成果である「居延漢簡考釋」が唯一つの手掛りである。私はこの勞氏の業績を出發點として、その烽燧の配置關係を少しく考えて見たい。

たゞ最初に斷つておかねばならないことは、木簡の出土位置が全く不明であり、従つて燧名とその位置關係とは、

飽くまでも相對的な關係で、地理的に絶對的な位置が設定出来ないこと。第二にこの研究で扱う燧名の存續年代が確實に實證し得ず、居延簡に、

萬世燧皆廢置、不能發遣卒、遣數詔、已可見矣。尤母狀、遣已□ 元・四

と言う例があるが、武帝の末年より建武の始めまで一應全燧が存續したという、二つの假定の下に論じなければならなかつたことである。

一

本論に入るに先だち、漢代烽燧組織の制度を勞幹氏の研究によつて概觀しよう。漢代に於ける兵制は、徵兵制であつたことは言うまでもない。この徵兵によつて出來た軍隊

は地方に於いては、郡毎にその太守が統べていた。そして太守の下に都尉があり、これが専ら軍事を扱った。居延など河西四郡の邊境地帯にはこの郡の都尉の下に更に數個の都尉があり、この都尉毎に内郡の縣にならつて秩六百石の候官が數個ある。この候官の下に數個の候が存し、候長の秩百石、更にこの候の下に數個の縣があり、この様な組織によつて烽燧が運営されていた。末尾にあげた縣名表は、居延木簡によつて勞榦氏が作つたものに補正を加えたものであり、以下この表を参照しつゝ論究する。

先ず第一に表のうち卅井候官と甲渠候官との關係を考えて見たい。勞氏は「居延漢簡考釋」考證之部卷一の編成表に於いて、萬年・萬歲二縣よりなる萬歲候と吞遠・吞北・安世よりなる吞遠候とを卅井候官に所屬せしめている。然しながら同書釋文之部を通觀するに、これら二縣に關する簡例數個のうち、

甲渠萬歲候長就部五鳳四年十月戌卒被簿 二・三

甲渠萬歲候長楊商不在署 八・六

という二例は、萬歲候・萬歲候が甲渠候官に屬するものであることを明示している。そして萬年縣について見るに、

同表に萬年縣の例として勞氏の擧げた簡には、
候吏史已取

吞遠部 吞北縣長爲已取 令取三千六百

萬年縣長已取 二二・二

とあり、吞北縣と共に吞遠部即ち吞遠候の下に屬してゐることが明瞭である。この吞遠は勞氏によれば同じく卅井候官に屬するものであるから、勞氏の言う萬歲候は卅井と甲渠との二候官に分割されることになる。

然らば吞遠候の卅井候官に屬することは、そのまま承認して間違いないか。この問題と關聯して勞氏が甲渠候官に編入する止害・止北・駟望・當曲などの縣について併せ考えよう。止害・止北二縣について勞氏の擧げた二・三、三簡には、
出鋪錢萬五千 給吞遠倉 十月丙戌吞遠候史彭受令
史

止一升 □□縣卒王博 當曲縣卒王安世

止害縣卒王憲 駟望縣卒王□□

止北縣卒陳□ (二・三・三)

とある。この文書は吞遠候史の彭が居延都尉の令史から鋪錢を受領した際の文書である。そしてこの五縣の卒は吞遠

候史につけられた従者であろう。然らばこれらの際^二は吞遠候を通して卅井候官に屬していたのであろうか。私が居延簡より得た資料のうちには次の如き

居延甲渠止害際長居延隄里公乘孫勳年卅、甘露四年十

一月辛未除。四・三

本始三年九月庚子、虜可九十人、甲渠止北際略得卒一人、盜取官三石弩一矢十二牛一、衣物存放、司馬宜昌將騎百八十二人、從都尉追。五・元

の二簡があり、この二簡が甲渠に屬するものであることを物語る。更には

甲渠吞遠候史騏昌 三・六

という簡は、吞遠候が實は甲渠に所屬したものであることを教えている。かくしてこれらの際はすべて甲渠候官の下にあつたことが明らかになる。

然らばこれらと卅井候官との關係は如何。これに關しては

□矢當曲卒□□卅井誠□□ 六・四

という一例がある。これは勞氏によれば烽燧類に入れられる文書であり、烽燧間の任務について書いたものである。

しかし、この斷簡ではその意味する所は明らかではないが、恐らくは、烽燧間の信號に關するものであろう。⁹⁾従つて、この當曲際は卅井候官の地域に比較的近い所にあつたと考えられる。

故に以上に述べて來た如き、止北・止害・當曲・駟望・萬年・吞北などから構成されていたと見られる吞遠候は、甲渠と卅井との兩候官の接續地帯にあつたと考えて間違いないであろう。

二

次に私がとりあげるのは、殄北候官と甲渠候官、及びこれに關聯して居延城と甲渠候官との關係である。即ち附圖に見られる如く、勞榦氏はエチナ河に沿い、南から北に甲渠候官、居延城、殄北候官の順に配置した。この三者の關係如何というのがこの節の問題である。

この手掛りとなるものゝ一つに、漢代烽燧の任務の一つである日迹の記録がある。即ち各際はその監視範圍の巡察が日課であり、際の分擔毎に砂をならした天田を設け、その上に殘された足跡によつて虜の侵入を發見するというの

である。

第三際 卒□□甲申迹盡癸巳積十日、張某甲午迹盡癸卯積十日、卒韓憲金甲辰迹盡壬子積九日・凡迹廿九日

母人馬蘭越塞天田出入迹 二五七五

は、第三際の日迹の記録であるが、更に此等の際を數個あつめた候毎にもその管轄下の巡察が行われていたことは、次の

□候長充 六月甲子迹盡癸巳積卅日、ニ迹從第四際南界

北盡第九際北界、母越塞蘭出入天田迹。 六七

甲渠武賢際、北到誠北際回望。候長一人際長一人、卒

四人、守郭卒六人。(以下略) 九八・一

とある例などから、候毎には一ヶ月を單位とする巡察があつたようである。

私が甲渠候官と珍北候官との關係を考えるのも、このような所謂日迹の範圍によつてである。即ち次の

次吞際、卒魯候外人、九月甲午迹盡庚申積廿七日省珍

北、卒憲常魯當時壽樂、九月甲午迹盡癸亥積卅日

二六五・一

という簡は、その形式から見て、次吞際に於いて書かれた

ものであり、次吞際の卒の巡察をしながら珍北まで至つた記録である。そして、この次吞際は次の簡に

里(居)延甲渠次吞際長公乘范叔世 二六六・二

とあるから、明らかに甲渠候官下の際である。

さうして、候官が烽際活動の最大單位であるから、珍北候官と甲渠候官とは隣接してはたすである。更に一例を舉げるならば

廣田以次傳行至望遠止。□十二月辛未、甲渠母傷候長

安候史個人敢言之、蛋食時、臨木際卒□寫移、疑虜有

大衆」不去、欲竝入爲寇、檄到、循行部界中、嚴教吏

卒、驚烽火、明天田、謹途候候望、禁止往來行者、定

藩火、輦送便兵戰鬪具、」母爲虜所幸稟已先聞知、失

亡軍事、母忽如律令

／十二月壬申、珍北甲□候長縵未レ央、候史包際長崎等、

疑虜有大衆、欲竝入爲寇、檄到、縵等各循行部界中、

教吏」卒、(以下前文に同じ) 二六七

という居延簡中の最長文者の一つがある。これは角材であり、數面にかけて以上のことが書かれている。この簡は何年の十二月かは不明であるが、重大な事件であつたらしく、

同時同内容の斷片と思われるものが數簡あり、そのうちには

廣田際以次傳行至望遠止。 英・三

と書したのもあり、又これとは別に

廣田際長篠 卒四人 宋攻 李視 董長久 單信

一書・五

という例もあるから、廣田は何候官所屬か不明であるが、一つの際であることは確實である。而して至望遠止の望遠は、

□ 珍北望遠 三品・三

の例から珍北候官下の望遠際であることがわかる。従つてこの文書は廣田際から順次際を傳え珍北の望遠際まで送らる可き文書である。

次に今少しくその内容に入つて見よう。某年十二月、匈奴の軍が出現したのに對し、各烽際に對して警戒を嚴にすべしという報が發せられた。十二月辛未の日の蚤食時（午前八時頃）、臨木際よりこの報らせを受けた母傷候長安らは自ら次の烽際にそれを傳えた。翌壬申には珍北候官下において、その報らせを管下の候長際長などに達したというのがその大意である。

私がこゝで注意したいのは、十二月辛未の日の甲渠母傷候に關した記事に續き、同じ内容のことが翌壬申の日に直ちに珍北管下に於いて行われ、しかも同版の木簡にそれが書かれていること、更にこの警報そのものが、際から際へと轉送さる可きものであつたこと、この二つの事柄が何を意味するかということである。即ち私はこのことから、匈奴に對して行われた活動において、甲渠候官と珍北候官とがその行動範圍を接していたと考えざるを得ない。

以上、先にあげた日迹の例と併せ考えて、甲渠と珍北とが密接なつながりがあつたと言つて先ず誤りはないと思われる。

然らばこの二候官と居延城との關係は如何。次にこれを論じよう。

その關係を見得る資料は、次節に使用する封檢類の文書を除き殆ど見當らないが、次の

居延候史李赦之 三月辛亥迹盡丁丑積廿七日、從

萬年際北界南盡次吞際南界、母人馬蘭越塞天田出入迹。

三月戊寅送府君至卅井縣案關日送御史李卿居延盡庚辰

三日不迹 三六・二

という一簡は重要である。萬年曆は前節に述べた如く甲渠候官に屬していた。而して次吞曆も前述の如くに、明らかに甲渠候官に屬するものである。しかも前簡によれば萬年曆より南次吞曆にかけて巡察を行つたのは居延候史であるから、この際は明らかに居延の管轄を受けていたことになり、矛盾が生ずる。然しながら現在これを解決する資料がないから斷言は出来ないが、この萬年・次吞などの際は居延と甲渠との接合地點になると考えて間違ひはないと思ふ。

以上第一・二兩節で述べた所を綜合すると、甲渠候官は珍北・居延・卅井の各候官に接し、且つ萬年・次吞・止害・止北・當曲・駟望などから成つたであろう吞遠候が、甲渠・居延・卅井をつなぐ地帯であつたことが判る。

而して、居延城を Khara-Khoto に、卅井候官を Boro Tsonch にあてる勞氏の説が正しいとするならば、この吞遠候は北緯一度三〇分、東經一〇一度少し東の地帯に存在したと見てよいであろう。

三

我々は前二節において居延都尉下の地域の接觸關係を見て來た。この節に於いては今一つの方法、文書轉送の記錄として殘された封檢類の木簡を利用して今一度居延都尉下の關係を見よう。

南書二封皆都尉章・詣張掖太守府、甲戌。六月戊申夜大半三分、執胡卒□受不庸卒樂、巳酉平旦一分、付誠北卒良 一八五・三、四九・三

これは都尉より張掖太守あてに送る文書の封檢である。このうち文書轉送の経路がわかるのは六月戊申以下である。即ち六月戊申の夜半（午前一時頃）不庸卒の樂から文書を受けとつた執胡卒の卒某は、自らこれを持參し、翌巳酉の日の午前二時頃に誠北の卒の良に手渡したのである。而して南書とは南に送る文書の意であり、従つてこの三つの際は北から不庸―執胡―誠北の順に存在していたことがわかるのである。

この方法によつて以下居延都尉下の關係を見よう。先ず南書一封居延都尉章、詣張掖太守府、十一月甲子夜大

半、當曲卒昌受收降卒輔、辛丑卒食一分、臨木卒□付
卅井卒弘□中□界定行□程二時二分 三七・七

という簡文を前例にならつて解すると、居延都尉の發した文書は、收降—當曲—臨木—卅井というコースを通過つて南に送られたことがわかる。これを北行の例にとれば、

北書三封合檄板檄各一、其三封板檄張掖守章詣府。合檄牛駿印詣張掖太守府牛掾在所。九月庚午下鋪十分、臨木卒副受卅井卒弘、雞鳴時、當□卒昌付收降卒福。界中九十五里、定行八時三分、實行七時二分。 一五七・四

八月庚戌夜少半、臨木卒午受卅井□甲□中五分、當曲卒同付居延收降卒□五里□□時□□ 二七〇・二

の如き例があり、卅井—臨木—當曲—收降という経路が判明する。これは前例と完全な逆のコースで、南行の場合と同じである。

而して收降際は居延收降とあるから、居延に屬すること
は明白であり、臨木が甲渠候官に屬することは次の

甲渠臨木隊長 卒鄭鳳代發（以下略） 八九・二

居延甲渠臨木隊長王積 四八四・五二

によつて明らかであるから、卅井候官と居延城とを結ぶコ

ースが明らかとなつた。而して卅井候官が甲渠候官の南に位置していたことが明らかであることを此處に注意しておく。

然しながらこの居延管下には今一つのコースがあつた。それは次の

北書五封、夫入。其一封肩水倉長印詣都尉府。一封詣饒得丞印詣居延。一封居延左尉印詣居延。一封昭武長印詣居延。一封氏池長印詣居延。三月庚戌日出十分、吞遠卒□五五分付不侵卒士 三七・一

という簡である。この文は吞遠卒の下に數字不明の所があるが、文例からいつて吞遠—不侵と北上したものであることは、明らかである。南行についても同じように

三月丁丑、入完。當曲卒□□收降卒敝、夜六時分、付不侵卒賀、雞鳴五分、付各遠蓋。 三二・（面）

の如き簡がある。勞氏の釋文に於いては、谷・吞・各が誤つて釋されていると思われる節が多いから、この各遠は際名の例から見て吞遠であろう。而して收降は收降際は誤りであろうから、これによれば收降—當曲—不侵—吞遠というコースが設定し得る。

このコースの吞遠は、先に述べた如く、甲渠・卅井兩候官の接觸點にある甲渠候官下の候である。不侵は次の

十月壬寅、甲渠鄣候喜告尉謂不侵候長赦等、寫移、書到輒作治、已成言、會月十五日、詣言府如律令／士吏宜令史起 一三九・六、一四二・三

という簡の内容から當然甲渠候官に屬するものであることは明らかである。従つて次の如きルートを設定し得る。

居延——收降——當曲——不侵——吞遠
——臨木——卅井

次には臨木際より別に北行のコースがあつたことが明らかである。即ち

□賢際卒辟受城北際卒損、之臨木際、□食時付卅井城務北際卒尊、□中十七里□□ 四四・六

という例に就いて見るに、この城北は釋字の誤りで誠北であり、□賢際は他に「賢」の字のつく際名が見當らないから甲渠の武賢際であるとしなければならぬ。又次の

□都尉府・□都尉府・中己 十月甲辰日矢時、誠北卒

□鉗庭、下鋪四分、付臨木卒□ 二三・三¹⁰⁾

という例から見て北より次の如きコースが考へ得る。

誠北——武賢——鉗庭——臨木——卅井務北

而して武賢際と誠北際との關係は前節にもあげた「甲渠武賢際長 北到誠北際回望。云々」¹¹⁾の簡例によつてもその連絡が證し得る。鉗庭際については、これは甲渠候官から殄北候官に通ずる路でもあつたらしく、

□薪、日入三分、鉗庭際長周安付殄北 一五二・六

という例があり、午後六時頃に鉗庭際から烽火の信號を殄北に向け發したことがわかる。これは前節にも述べた如く、甲渠と殄北とが連續していたことを證するものである。

以上此節に於いて三部に分けて論じた居延都尉管下傳書の經路を併せ考へるならば、次の如き系統圖が出来る。

居延——收降——當曲——不侵——吞遠
——誠北——武賢——臨木——卅井
——殄北——鉗庭

四

この節では肩水都尉下の候際の關係について調べて見よう。居延附近出土の漢簡は西北科學考察團の調査コースの

ためか居延特に甲渠に關する記録が多く、肩水地區についてはその證とするに足るものが少い。ために僅かな封檢類の利用より出来なかつたが、以下少しく之について述べよう。

南書二輩二封。潘和尉印詣肩水都尉府。六月廿三日庚

申日食坐五分、沙頭長亭使驛北卒音。日東中六分、沙

頭亭卒宣付驛馬卒同。五〇五・六¹²⁾

南書二輩二封。張掖肩候詣肩水都尉府。六月廿四日辛

酉日蚤食時、沙頭亭長使驛北卒音、日食時二分、沙頭

卒宣付驛馬卒同。五〇五・七

この二例は、北より南へ、肩水都尉府に送る文書の封檢である。而して今まで見て來た例からすれば、「沙頭亭長使驛北卒音」の使の字は、當時これに受の意味があつたか、或は受の誤釋と見なければならぬ。¹³⁾即ち驛北の卒である音から文書を受けた沙頭亭長は、部下の宣をしてこれを次に傳達せしめ、驛馬に於いて卒の同に受け渡したことを示している。従つて、北より南に驛北―沙頭―驛馬というコースがあつたことを示している。¹⁴⁾この逆に北行については、十二月三日。北書七封。□二封張掖太字廩□書一封一

封皆十一月丙午起、詔書一封十一月甲辰起、一封十二月戊戌起、皆詣居延都尉府。二封河東太守丞、皆詣居延都尉府。一封十日甲子起、一十月丁卯起。一封府君章、詣肩水。十二月乙卯日入時、卒憲父不今卒恭、夜昏時、沙頭卒忠付驛北卒復。五〇五・三¹⁵⁾という簡があり、居延都尉府などに北送する文書は南から不今―沙頭―驛北と送られる。そうして驛馬と不今との二聯の關係は、

／一封居延都尉詣肩水府。□□詣肩水府。五月甲午

起。昏時、驛馬卒良使沙頭卒同、□時良付不今卒豐。

四九六・六

という文書があり、現在の所、この驛馬は驛馬の誤りと解してよいから、¹⁶⁾沙頭―驛馬―不今と南行することとなり、此處に北より驛北―沙頭―驛馬―不今という配置が考え得る。

次に以上のコースと廣地或は橐佗（佗は他とも書く）との關係について見よう。

□□□□一封、府記一致廣地塞廣地。二月甲子日入時、卒憲使不□小史晏、昏時、沙頭卒忠付驛北卒護。五〇五・八

という簡によれば、廣地に送られる文書は、不□―沙頭―
 驛北というコースをとる。これは先の十二月三日北書七封
 の記録と原簡番號の吾^五は同じで、恐らく同じ地點より出
 土したものであるから、兩者を併せ見ると、この不□小史
 晏から文書を受領した卒の憲及び驛北の卒に文書を渡した
 卒である沙頭の卒の忠とが兩簡とも同じであり、この不□
 は不今として間違いない。然らばこのコースも同じく不今
 ―沙頭―驛北を経て廣地に達したはずである。

これと同様に次の文書によれば、

□一封詣廣地。一封詣豪佗。□記二張掾印。十二月丁

卯夜半盡時、卒□□使不今卒恭、雞前鳴時、沙頭卒史

付驛北卒鄣。^{五〇三・五}

とあり、廣地及び豪佗に送られる文書も同じく不今―沙頭
 ―驛北と轉送された。¹⁷⁾

然らば豪佗、廣地、肩水の位置關係は如何というに、こ
 の關係を示す史料は見られない。たゞ次の

十月四日。南書二封。封封皆豪佗□□官、一詣肩水都
 尉府、一詣昭武。日出受。沙頭卒同付不令卒同。金關

時 ^{五〇三・二(面)}

といふ簡がある。居延木簡に於いては、今と令とが似た字
 体であるためか、勞幹氏の釋文を通見するに、同質文書の
 同じ場所に兩者が混用されている。従つてこの簡の不令も
 假りに不今と訂正出来る。¹⁸⁾ 又、この金關は普通肩水金關
 (四・五)として簡に多く見え、肩水城に近く設けられた通關
 である。¹⁹⁾ 故にこの經路は豪佗―沙頭―不今―金關―肩水と
 南下したこととなる。従つて廣地に送られるものと比較す
 れば、途中驛北驛を除くこととなり、これから考えて、豪
 佗候官は肩水から北行するこのコースの沙頭から岐れて行
 く地點にあつたのではないかと考えられる。

以上この節に述べた所をまとめるならば、肩水都尉管下
 における文書輸送の經路と候驛の位置は、北より

豪佗

廣地―驛北―沙頭―驛馬―不今―肩水

となる。この配置關係は勞氏が「居延漢簡考釋」考證之部
 の末尾に附した地圖の上で、廣地を最も南に置き、北へ肩
 水、豪佗と配置するのと非常な相違を示すことになる。然
 しながら此の豪佗と肩水との間にこゝで述べて來た如き南
 北の關係が認められるならば、同じ關係が以上に舉げた簡

から當然廣地と肩水との間にも認められて然る可きであろう。²⁰⁾

五

以上數節にわたり別個に居延地區と肩水地區とを論じて來たが、この節では最後にこの兩地區を結ぶルートを考えねばならない。

第三節に述べた如く、居延地區の最南端は卅井候官の地域である。而してこの卅井候官のうち或るものは卅井務北際で終り、或るものは單に卅井卒といつてゐるのみである。この卅井卒というのは如何に解したらよいのであろうか。

居延簡を見れば、卅井候官、卅井候、卅井際、何れもが存在したことは事實であるから、通例からすれば卅井卒は卅井際、卒ということになり、従つて卅井際と務北際との關係は如何にということになる。然しながら次節に述べる如く、肩水都尉下に於いて文書傳送の經路となつていた驛北、沙頭が際といわれるよりも寧ろ亭と呼ばれる場合が多く、當然其處に驛亭の制があり、そのコースが一定していたと考えられるから、居延地區に於いても卅井際といふ、務北際というも、そのコースが全然別であつたとは考えられな

い。特に第三節に於いて當曲以南を不侵―吞遠の路と臨木を經る路とに分つたが、第二節に述べた如く、吞遠候の位置が明らかに甲渠・卅井兩候官の接續地帯にあつたのであるから、たゞ輸送の役に當つた卒の所屬する際が異つたのみで、恐らくそのコースは同じであつた筈である。このように考えるならば、卅井といふ、務北というも、たゞこれらが、驛亭のコース近くに、しかも兩者が同じ候に所屬していたと假定して、そのコースは一定していたと見て差支えないであらう。²¹⁾

然しながら卅井と肩水都尉下の地區を結ぶルートについては現在の所、確かな資料がなく、その關係を見るに非常な困難を感じる。たゞ次の

南書一輩一封。居延都尉章、詣張掖太守府。九月辛巳日入時、張掖□卒□□臨渠臨木□□□□月卅井高要際卒鄭升廣地北□際卒□北母□□□城北際卒。卅八里定行三時・五分□□三十□。〔六六・九〕

の簡は、甲渠に屬する臨木際、卅井の高要際、廣地の北□際、肩水の城北際と順次北より南に擧げられているから、²²⁾或はその一證かとも思われるが、然し不明の字多く、特に

張掖に送られる文書でありながら、最初に張掖の卒が出ることは何を意味するか判明しないので、確實な資料となし得ない。或はまた、

□詣居延都尉府。五月壬戌下舖時、臨木卒護受卅井官移□燂卒□。癸亥□食五分、尙□受□卒□執胡□收辟非□居五官。三九・四

という北行文書と思われる簡も資料の一つかと思う。この辟非と執胡については各々

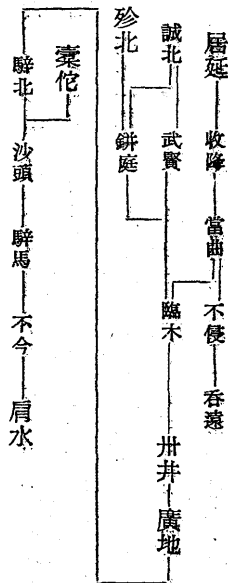
本始二年閏月乙亥、虜可卒六騎入卅井辟非□ 三九・五

肩水候官執胡燂長公大夫累路人以下略 一七九・四

といふ資料により、未々卅井と肩水に属していたことが明らかであるから、肩水と居延とを結ぶルートであつたかとも考えられる。然し、北行文書でありながら、南にある際に關する日附けが明らかに壬戌の翌日の癸亥であることは、不明の文字が多いことと共に、この簡の利用を困難にしている。

然しながら三五頁で注意した如く、卅井候官は居延都尉下の最南にあり、また肩水都尉では廣地候官が最も北にあつたのであるから、當然この卅井と廣地との間には何らか

のコースがあつたのであり、この間の詳しいことは不明であるが、この兩者を結ぶことに誤りはないであらう。従つて以上各節にわたつて述べて來た所を總合すれば、次の如く圖示し得る。⁰²³



右の圖には甲渠候官が現れぬが、誠北・武賢・餅庭・當曲、不侵・吞遠・臨木よりなる地域が甲渠候官の地域である。圖中大字は候官である。

たゞ我々は、この關係位置が専ら木簡の文例によつて設定されたものであり、その簡文の解讀も未だ充分になされていない現状であるから、西北科學考察團の調査報告やこの居延簡の出土地點が明らかになれば、當然訂正さる可きものであるが、今一應こゝに私見を述べ後日の研究に資にしたいと思う。

六 附 論

以上五節にわたり漢代居延戰線主力の展開の大略を眺めて來た。この節では二・三これを補い、参考に資したい。

1、卅井候官の務北縣について。

三六頁にあげた木簡四八・四九には、

□賢縣卒辟受城北縣卒損、之臨木縣。□食時、付卅井城務北縣卒尊、□中十七里□□。

という如く、務北縣には卅井城と冠されている。勞氏は前述の考證に於いて、この務北縣を甲渠候官に屬せしめた。然らばこの卅井城を如何に解したらよいのか。

一般に候官は卅井候官、甲渠候官などと呼ばれるが、時には單に甲渠官と呼ばれたこともあつたらしい。即ち

甲渠候官尉史王（並）□。大史

甲渠官尉史 史。三・一九（背）

など、或は勞氏が封函書囊の檢署として分類する

甲渠候官。李忠印。□□、第八卒政以來。三・二

甲渠候。印日陳德昌印。八月乙巳、第八卒夏費以來。三・七

甲渠官。秦照。一月庚申、第八卒。三・三

甲渠官、以亭行。楊放印。七月丁卯、卒同以來・二事

一三・三

甲渠官。王彭印。四月乙丑、卒同以來□。一三・四（背）

などの例は、甲渠候官といふ甲渠官といふ、すべて受信者の名であり、以上の數例を比較するならば、候官は又時に官とのみ呼ばれていたと考え得る。このことは卅井候官についても同じで、第五節四〇頁にある居延都尉に送る文書の封檢には卅井官移□縣とあり、従つてこの卅井官と卅井城とは同じく卅井候官を意味したと解して誤りはない。故に務北は當然卅井に屬すべきものであり、従つて

□井調務北縣 四七・七

の上缺部には井の上に卅の字があり、卅井候官から務北縣に對して調發を行つた記録と解す可きである。

2、驂北と驂馬について。

第四節にしばしば出るこの二つの縣について見るに、勞翰氏は驂北を肩水候官に、驂馬を甲渠に所屬せしめたが、この驂馬については、肩水候官とは斷言出来ないが、少くとも肩水都尉下に屬さねばならないことは第四節で明らかである。そうして今驂北に關する簡を此處に列舉すると、

驛北亭卒東郡博平博里皇隨來。有方一、革甲髹髹各一、
斬干幡各一、弩頓一、三石承弩一。^{三二}

四月丙子、肩水驛北亭長敏以私印兼行候事、謂關舊夫吏、
寫移、言□如律令 / 令史憲^レ光^レ博、尉史賢。^{三三}
驛北隊六名具弩一完。^{三四}（この六名の名は弩の強さ
を示す單位であるから石に改められねばならぬ）

驛北亭卒趙□明 ^{三五}

□粟、捕鵞亡人所依倚匿處、必得、得詣如書。毋令吏
民相牽證……中略……驛北亭長歐等八人戍卒孟陽等十
八人、處索新□□亡人所依倚處、投書相牽 ^{三六}
の數例があり、烽隊の任、警察の任をも郵驛の任と併せ行
つていたことが明らかであり、これが亭と呼ばれることが
多いのに注意しなければならない。沙頭或は不今も亦同じ
ように理解さる可きであらう。

次に驛馬について見るに、

馬長史、卽有吏卒民屯士亡者、具署郡縣里名姓年長物
色房衣服贗操初亡年月日人數白報、與病已・謹案屬丞。
始元二年、戍田卒千五百人、爲驛馬田官寫涇渠。迺正

月己酉、淮陽郡、^{三六}

驛馬田官、元鳳六年三月、驛除。^{三七}

の二例がある。後者は恐らく前後が缺けたものであつて、
その意味する所は不明である。この田官が如何なるもので
あるか、わからないが、前者によつて見れば、恐らくは屯
田特にそのうちの農事を重視する官であると思われる。而
かもこれによれば、始元二年に千五百人の田卒を使役して
いるから、これは一時的なことであるとしても、可成り大
きな組織を持ち得る官であつたことが明らかである。更に
このことは、その内容は不明であるが、

本始二年二月辛巳朔己未、驛馬捕虜隊長袁勝受後堅校
作別□受下□□□□□中用所^{三八}

の如く驛馬捕虜隊という呼び方は、木簡の例にならつて見
れば、驛馬が候官に近い位置を占めるものであると考えて
誤りはない。

これに關聯して第三節に述べた如き居延都尉下の文書郵
送にあらわれるところの鉅庭・不侵・吞遠・臨木が際と呼
ばれると共に候或は部とも呼ばれていることである。

□月戊申、甲渠候顯謂鉅庭候長仁（以下略）。^{三九}

不侵候長昌敢言之。謹（以下缺）^{四〇}

不侵部蜜矢五十四。(八三・云)

建昭二年十二月戊子朔戊子、吞遠候長湯敢言之(以下略)。(二七・云)

吞遠部、候史吏已取(前出以下略)。(二二・云)

河平二年九月己未、令史博受臨水候長政(以下缺)。(二七・云)

臨水部吏九人五十四、誠北部吏十一人六十六。(二二・云)

などその例である。この時代の烽燧制度に於いて、この部或は候が如何なる意味をもつのか不明であるが、何れも燧より大きなものであることには間違いない。更に郵書の際、卅井候官においては卅井卒がその職にあることが多いのと併せ考えるならば、この文書の受け渡しの場所是一般の燧より大きなものであると見て差支えない。従つて肩水都尉下の亭について見ても、一般の燧とは多少異つた性格をもつていたと推測出来るのではなからうか。

3、卅井候官の辟非燧について。

勞輸氏はその考證において、この辟非燧を肩水候官に屬せしめたが、これが實際は卅井に屬したものであることは、第五節で引いた

本始二年閏月乙亥、虜可卒六騎入卅井辟非燧。(三二・云)

という簡で明白である。然し次の如き簡を見ると、

□具弩十傷洞□胡辟非如意臨渠、三石具弩四皆傷、誓十四完、盾四完、陷堅稟矢五十、其五疇呼、稟矢千五十、其卅四疇呼、三辟非、十二的意、二第廿、八臨渠、廿一完軍、蜜矢千二百、其卅疇呼、獲胡十八、辟非二、如意二、第六八、臨渠六、完畢一封。(三二・云)(的意は如意の誤りならん)

とあつて獲胡・辟非・如意・臨渠及第六・第廿の燧が同出する。この時代の烽燧には固有名詞をもつたものとナンバーによるものとが併行し、このナンバーは第卅八燧(二四・三)まで檢出され、各候官に多少の差はあるが存在した。而してこのうちの如意燧に關しては、

□水候官如意燧長公士□□肩水候□□歲(三三・云)

とあり、肩水候官に屬したことが明らかであり、廣地候官下におく勞氏と、これも異なる。

一般に烽燧は候官一候一燧という統屬關係をもつて運營されているから、その武器の所屬についても當然同じことがいわれる。然らば先の武器檢査の文書にあらわれた燧は當然一グループの燧と見なければならぬ。従つてこの辟

非、如意などの縣が肩水候官に屬したのか、或は卅井候官に屬したのか決定出来なくなる。この解決は、若し同一名の縣が他候官にはなく、全く固有の名稱として存在していたとするならば、一時は同一群に扱はれた縣が、本始二年には少くともそのうちの辟非は卅井に屬し、又ある時には如意縣は肩水候官に所屬するものであつたと考えるより途がない。従つて第二節の所謂日迹などの例よりすれば、これら一群の縣は、卅井・肩水兩候官の接觸地域にあり、ひいては、卅井と肩水兩候官が直接に續いていたことになる。若しかくするならば、第五節に述べた居延・肩水の連絡はことなつた解釋を必要とすることになる。即ち、廣地・橐佗などの候官は、エチナ河に沿つて通る居延・肩水の路から岐れて、その東側に展開していたことになる。又卅井候官についても、その管轄地域は第二節の末に述べた如き吞遠の地域の附近を一つの點として東は Boro Tsonch、南は河に沿つて下り、辟非・如意縣の附近で肩水候官と接したことになる、『の如き地域をその管轄區域とすることになる。故に居延・肩水の路も、卅井候官のある縣から廣地を経て南下する道と、直接肩水候官下の或る縣を経るも

のとの二つが考え得る。

これと關聯して考える可きは、勞氏が累虜候を肩水候官と卅井候官との兩者の下に設定したことである。この累虜に關する本簡は、卅井累虜縣と明記するもの二例（六・四、一六・八）、累虜候官尉史は一例（六・三）、累虜候一例（六・三）、累虜縣五例（三・四、一五・六、三三・二、三三・三、三三・五）、累虜候と驩喜縣とを并記するもの一例（六・三）のほかに、

元始三年八月甲辰朔丁巳、累虜候長祥、塞曹史 塞曹

史 塞曹史 塞（面）

兼倉曹、塞曹史並拜再拜言肩水（都尉府）（背）一五・二四という一簡がある。勞氏は恐らくこの簡から肩水下の累虜候を考えられたものであらう。然し、（累虜）塞曹史という如く塞が地名に附く簡は肩水、甲渠、珍北、橐佗など候官と名を同じくするものである。然れば、この塞と候官と候とが如何なる立体的な結びつきがあるか不明であるが、累虜候官と稱する簡と相應する。従つてこの本簡は、文書としては寧ろ落書であらうが、この元始三年の頃には累虜候官が在在したことになり、而かも肩水都尉に屬していたと考えられる。従つてある時期には卅井候官に屬したものが、

前漢末には肩水都尉下の候官として獨立していたと考えられる。故に先の如意、辟非など一群の際に近く存在して、卅井・肩水兩候官の接觸地帯をなしていたと考えてよい。

以上この研究で述べて来た所は、最初に斷つた如く、二つの假定の下に見て来たのである。そのほか、木簡には、烽燧間の距離を書したのももあり、當然この面から再検討しなければならぬが、これは次の段階に譲りたい。尙、この研究は、二十七年度科學研究費による研究の一部である。

① 勞幹著「居延漢簡考釋」考證之部卷一。「居延漢簡考釋序目」(中央研究院歷史語言研究所集刊第十本)。「釋漢代之亭障與烽燧」(同第十九本)。

② 第六節にも述べた如く、部と候との差異は漢簡中の資料では不明であるが、の際のうち多少大きく、數個の際を統轄するものを時により部といつたり、候といつたのではないかと思われる。

③ □矢は矢の誤りで、この字の上は日字であろう。日矢即ち時を示す日映時で、午後二時を示す語ではないかと思う。信號については③を見られたい。然しこれは文書郵送のものかも知れず、この場合のことは、第三節以下に述べる。

④ 省彥北の省字については、漢簡中には省作、省在府、省卒など色々な使用法があり、その意味は明らかでないが、この場

合の省は察、望などの意味でないかと思われる。何れにしても彥北に至つたことには間違いないのではないかと考える。

⑤ 勞幹氏は考證卷一に於いて、居延都尉を黑城 Khara-Khoto、肩水候官、肩水都尉を紅城子 Bahan durwujin、甲渠候官を破城子 Mudurwujin、卅井候官を波羅塞吉 Boro Tsonch、

彥北候官を反顏陶賴 Wayan Tori、廣地候官を地灣城 Ulan dürüjin、橐佗候官を大灣城 Taralgin dürüjin に比定している。然し、同卷二の末に於いては地灣城を肩水都尉、その紅城子を橐佗候官、雙城子を廣地候官にあて、地圖を附している。而してその地圖に於いては甲渠候官は Eki-durwujin とする。前説によればその配置は北より

彥北—居延—卅井—甲渠—橐佗—肩水—廣地—橐佗となり、後者によれば、

彥北—居延—卅井—甲渠—橐佗—肩水—廣地となる。

⑥ この簡文の誠北は城北の誤釋であると思われるが、これについては⑨を見られたい。

⑦ この簡の甲子という日附けは、その日數から見て當然庚子としなければならぬ。また卒食は蚤食の誤りであろう。

⑧ 今一つ次の如き簡がある。

詣張掖太守府。正月戊午食時、當西卒揚受居延收關卒褒、
下舖、□□卒護時甚□□候卒則當□□被□卅□持中□。

五六三

これには居延收關とあり、この收際卒とは收關卒のことかも知れない。漢簡中には第四節にもあがる肩水金關のほか、居延索關、彥北始廣關、卅井縣案關が見られる。何れも候官

以上のものであり、候官は内郡の縣に當るものであるから、縣城に附設された通關であろう。そうして卅井縣案關といふ、また第六節(1)に述べる卅井城、務北縣という例を見るならば、候官が縣に當るものであつたことは事實である。

⑨ 誠北の誠と城北の城とは字体の類似からか、木簡を縣名によつて整理する際、非常な困難を感じる。誠北については、

上略 五年正月申、授爲甲渠誠北縣長、至甘露元年六月授爲殄北塞外渠井縣長、下略 三・四

という簡があり、明らかに甲渠所屬の縣であることがわかるが、城北については記載がない。然し第五節三九頁の南書一輩一封の記載を見れば、城北縣は卅井より南にあつたと推定してよい。従つてこの城北縣がそのまゝ正しいとすることは出来ない。特に誠北縣が武賢縣より北にあつたことは、前の日述の所に引いた簡によつて明らかであるから。而うしてこの節の最初に引用した郵書の例文によれば、この誠北も城北の誤りであり、更に執胡縣が肩水候官に所屬するものであるから(これについては第五節を見られたし)、この城北(簡文の誠北)は當然肩水下の而かも執胡より南にあつたと考えられる。

⑩ この日矢も同じく日失、即ち日映でなければならぬ。

⑪ 信號については⑬に述べる。

⑫ 日食坐は、勞榦氏の考證卷二によれば、日東中即ち隅中で、午前十時になるから、それより前の日食時午前八時のことであり、坐は時と改む可きである。

⑬ こゝでは一應受の意味としたが、この使と受とについては、

烽際間の信號の上でも問題となる。例えば

□午日下鋪時、使居延蓬一通。夜食時、塢上莖火一通。

居延莖火。三三・二三

樂昌縣長已、戊申日酉中時、使並山際塢上表再通。夜人

定時莖火三通、已酉日□ 三三・三五

などを見るに、日中は旗により、夜間は莖火で信號を行つたことがわかる。然しこの使は使役の動詞か或は受けるの意か明らかではないが、信號の性質から見て、更には第二例の如く、樂昌縣長の信號の記録と解しなければならぬ文意からして、使役の意味よりは受の意に解した方が正しいのではないかと思う。更に次の

塢上旁蓬一通、同時付並山、丙辰日入時 三三・二

の如きは、ある際が他から受けた信號を直ちに並山際に傳送したと解し得るから、文書の傳送と同じく、受の意味に解す可きであろう。

⑭ 驛北、驛馬などについては第六節の(2)を見られたし。

⑮ この簡には、實は肩水に送られる文書もあつたことが書かれている。従つて、不今、沙頭、驛北などの際が肩水より南にあつたと考えられないこともない。然し北より肩水に送られる文書の場合にも沙頭、驛北の名があらわれるから、先づ肩水以北にあつたと考えてよいのではないか。従つて一封府君章詣肩水是發信の日附けもない所を見れば、肩水以南から送られて來た文書數七に合する如く、その肩水に送られる可き文書がふくまれていたことを著しておいたのではないかと思う。尙、十日甲子は十月甲子の誤り、卒意の下の父は、すぐ

後に出る廣地あての文書にてらして當然使とさる可きであり、従つて受の意に解さる可きである。

- ⑮ 驛と驛とは字体がくづれれば、まぎらわしいものとなるであらう。原簡の寫眞すら見えない我々にとつて俄かに斷定し得ないが、他に驛馬を驛名とする簡が見當らないので、恐らくは驛馬の誤りであらう。

- ⑯ この簡と共に前の廣地塞廣地に送られる文書の封檢についても、不今―沙頭―驛北のコースを直ちに認めることには、私自身いさゝか疑問を感じざるを得ない。というのは、この二簡は共に上部が缺けているので、その缺部に或は居延地區に送られる管の文書についての記載があるかも知れないからである。若しかゝる記載があつたとすれば、⑮で述べたと同じ方法によつて、これらの際が橐佗、廣地より北にあつたとしてもよいからである。たゞ橐佗・廣地を北にあると考える理由は、次の橐佗・廣地・肩水の關係について述べた所にあるのである。

- ⑰ 令と今については、その字体の類似以外に、次の如き文例を比較することが出来るのではないかと思う。

(1) 今除爲驛得騎士。三二・三

(2) 脩行純山里公乘范弘、年廿一。今除爲甲渠尉史、代王輔。

二五・三

(3) 居延甲渠士吏驛得廣宛里公乘寶敏、能不宜其官。今換補驛谷候長、代呂脩。三三・三

(4) 紀褒、今調爲第十候長、代邢志。三二・二

(5) 里孫賜、令肩水廣地令史代勤守。三八・三

(6) 中功一勞三月一日半日、令居延甲渠令史代段利。一九・三
これら數例のうち、(5)、(6)は當然肩水廣地令史、居延甲渠令史となつて前任者に代る意味であり、前の四例と同じ内容を示す管である。これらの例では寧ろ前四例の今を令とする方がよいと思われる。

⑱ ⑧を見られたし。

⑲ 勞幹氏の配置に關しては、⑤を見られたい。

⑳ 第六節の(2)を見られたい。此處では卅井卒を卅井驛の卒としたが、この第六によれば、單に卅井卒という時は、卅井候官の卒とした方がよいかも知れない。何れにしろ、その存在した場所は恐らく同所であつたと考えられる。

㉑ 城北驛に關しては⑨を見られたい。

㉒ ⑤と比較されたい。

㉓ ⑤に述べた如く、勞氏は、肩水都尉に於いて、肩水候官を最も北に置く説も出している。従つて勞氏のこの説も成立する可能性は充分ある。何分簡の發掘地點が不明で、これが明らかになれば、今少し正確な位置關係が設定出来ると思う。

執	胡	隣	179.4	安	主	候	38.17	終	古	282.5
乘	胡		502.3	次	東		155.15	莫	山	52.26
並	山		13.7	有	虜		227.5	斛	東	88.11
乘	山		339.8	延	拔		267.2(背)	移	迹	2.10
登	山		515.49	系	虜		428.5	通	望	505.14
要	山		10.22	東	便		507.2	執	適	255.15
窮	虜		44.22	東	部		20.12	給	合	85.5
破	虜		183.10	使	陽		225.13	黃	見	283.29
萬	世		5.18	城	正		61.15	給	東	454.3
破	胡		255.22	當	南		88.12	衙	寇	6.6
辟	北		29.7	入	新	隣	104.4	善	哉	410.3
辟	馬		504.2	二	墟		24.1	備	南	88.13
捕	虜		255.38	三	井		428.6	貴	胡	146.43
沙	頭		506.2	山	東		427.2(甲)	禽	寇	101.9
臨	渠		75.17	下	海		371.2	萬	力	213.13
如	意		239.78	三	張		190.1(背)	道	山	403.11
候	虜		232.11	三	人		73.15	與	主	141.10
始	安		37.57	夫	直		269.11	當	利	288.22
樂	昌		332.5	母	竟		562.7	減	寇	114.18
昭	武		20.11	尺	門		482.7	萬	福	213.13
受	降		433.32, 433.3	白	胡		52.55	會	澤	349.3
平	樂		43.23	北	部		511.16	祭	虜	561.17
富	井		8(p 445)	北	憂		393.11	算	山	282.9
倉	石		433.32, 433.3	母	麓		455.1	廣	田	160.13
城	北		163.19	且	亭		279.17	駝	南	75.1
破	胡	亭	103.42	行	隆		264.30	罷	虜	89.42
夷	胡	隣	177.10	安	登		131.12	撫	擊	59.1
窮	冠		332.24	先	漢		87.10	(龍)	山	8.10
廣	谷		324.5	安	口		138.7	谿	東	283.29
金	城		146.4	谷	水		273.35	臨	下	173.2
漢	充		10.3	延	平		26.16	臨	大	483.23
安	樂		332.14	利	胡		257.30	臨	井	17.36
禁	姦		10.13	延	軍		224.20	臨	池	220.17
正	姦		448.4	完	庭		179.8	臨	前	7.30
水	門		14.25	里	胡		251.19	願	北	214.43
介	令		495.21	服	會		142.26	三	泉	3.6
不	令		505.22	郡	道		35.7	井	東	459.2
不	令		502.1	直	虞		584.1	永	元	346.40
不	夜		506.5	宗	邦		220.13(面)	右	北	263.14
使	來		495.19	械	害		4.12	北	虜	498.8
以上各候官の點線以下の隣は、勞隣氏の編成表によつて編入したが、必ずしも確實ではない。				要	胡		303.35(面)	西	門	285.15
所屬不明の候・隣・亭				參	南		427.2(乙)	守	望	303.17
中	部	候	183.11	孟	冠		88.10	孟	竟	235.9
北	地	336.13, 336.12		駝	胡		308.7	思	亭	505.3
左	符	212.79		逆	塞		312.9	桓	望	280.18
左	渠	45.16		高	虜		50.6	駝	南	75.1
				寇	宗		273.27(面)	廣	緣	132.31
				望	城		505.5	臨	道	308.17
				望	泉		50.25	霸	胡	3.4
				望	南	隣	255.40	駝	南	502.7
				望	南		185.12			

居 延 燧 燧 表

居 延 都 尉	伏 要 胡	288.6	卅 井 燧	368.11
居 延 候 官	要 要 燧 害 木	89.21	卅 井 燧	305.2
小居 延 候 官	臨 臨 木 桐 北	32.15	降 高 要 非	163.19
左 遮 候	臨 臨 誠 次 吞	3.14	辟 果 喜	271.9
居 延 候	武 察 却 萬 吞	287.26	廣 利	233.12
收 定 穀 收 疆 居 農	萬 吞 萬 吞	143.28	廣 利	170.5
降 居 胡 關 漢 延	併 庭 侵 圍	89.5	水 都 尉	308.15
亨 亭 亭	不 里	40.8	水 都 尉	127.29
除 燧 候 官	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	8.6	囊 佗 候 官	77.39
珍 北 候 官	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	45.19	囊 佗 候 官	29.2
珍 北 候 官	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	111.29	延 壽 燧	29.1
渠 井 候	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	484.29, 484.45	吞 誠 囊 騎 石	81.8
望 遠 喜 北	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	28.1	前 東 燧	149.5
望 察 北	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	27.15	前 東 燧	75.30
甲 渠 候 官	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	231.26	前 東 燧	118.5
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	336.2	前 東 燧	408.1
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	193.6(面)	前 東 燧	487.3
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	35.6	廣 地 候 官	232.33
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	55.25	廣 地 候 官	407.2
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	276.17	廣 地 候 官	504.14
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	95.7	廣 地 候 官	232.28
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	185.3, 49.22	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	169.5	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	110.37	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	24.3	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	61.25	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	275.8	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	75.3	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	103.31	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	231.28	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	168.16	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	27.11	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	240.19	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	175.17	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	35.6	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	505.24	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	126.40, 536.4	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	254.17	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	160.4	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	卅 井 候 官	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	458.2	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	158.3	廣 地 候 官	131.19
不 誠 甲 夷 吞 餅 萬 母 臨 推 收 安 不	夷 平 滅 制 不 不 不 止 伐 臨 當 當 廣 武 延 三 正 木 河 樂 安 迹	454.24	廣 地 候 官	131.19

The Chinese Front in the Chu-yen (Etsin-gol) Region

Michiharu Itō

Though the Etsin-gol region played a very important pole as an advance front against the nomadic Hiung-nu, nothing is mentioned in the contemporary sources handed down to us as historical documents. As the result of Sven Hedin's expedition in 1930 an enormous number of Han MSS. were discovered in the Etsin-gol region, and they were put into order and printed with annotations by Mr. Lao Kan. Making

use of Lao Kan's edition,⁵ the present author tries to locate the positions of the forts, and in contrast to Lao Kan's view, i.e. T'ien-pei (珍北), Chü-yen (居延), Sa-ching (卅井), Chia-ch'ü (甲渠), Chien-shui (肩水), Kuang-ti (廣地) and T'o-t'o (橐它), from north to south along the Etsin-gol, identifying Wayan-tori with T'ien-pei, the present writer's view is as follows; T'ien-pei, Chü-yen, Sa-ching, Chia-chü, T'o-t'o, Chien-shui and Kuang-ti. They were the headquarters of military-administrative units, i.e., hou-kuan (候官), which at the sametime meant commander and corresponded with the prefecture in China Proper. The present author only gives the relative positions of the place names appearing in the MSS. without identifying them with the present names.